藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

希望をもたらす人
～外国人宣教師に神を見る～

イエズス会の初代総長であるイグナチオ・ロヨラは、神との深い交わりの体験を「霊操」という書物にまとめた。以来、今日に至るまで「霊操」は神との交わりを体験するテキストとして広く世界で使われている。

先日、広島市にあるイエズス会長束黙想の家で「霊操」の日本語訳者、バラ神父（現・益田教会主任）による四日間の霊操の黙想会が開かれ、私たち夫婦など十二人が参加した。

イエズス会28代総長・ペドロ・アルペ神父

さて、長束黙想の家の旧玄関前にはペドロ・アルペ神父の胸像が建っている。アルペ神父は二十八年間、日本で活躍、そのうち十六年間は長束修練院（現・黙想の家）の院長だった。

一九〇七年、スペインのバスク地方に生まれ、マドリッド大学医学部に入って医師を目指す。しかし、フランスの聖地ルルドへの巡礼で司祭になることを決意し、ロヨラのイエズス会修練院に入り司祭となる。

来日したのは一九三八年、太平洋戦争が始まる三年前である。二年後の一九四〇年、山口教会主任司祭に任命されるが、アメリカで勉強し、アメリカから入国したことなどからスパイ容疑で逮捕され、山口市で一カ月半拘留される。日本がハワイの真珠湾攻撃をする前年のことで、多くの外国人は要注意人物として特高からマークされたらしい。

容疑が晴れ、釈放されたのも束の間、一九四二年、広島長束修練院長に任命される。ここで原爆に遭遇するが、長束は爆心地から離れていたので、爆風で床にたたきつけられたが、けがはしなかった。

アルペ神父の胸像を囲むバラ神父と12人の黙想会参加者

この時、マドリッド大学で医師を目指したことが役立つ。長束修練院を開放し、百五十人を超える負傷者、病人を収容して手当てする。建物は今も当時のままで、畳の大広間は聖堂になっている。

一九五八年にアルペ神父はイエズス会日本管区長に就任。一九六五年には会員数が二万人を超えるイエズス会の第二十八代総長に選ばれ、日本を離れて本部のローマに拠点を移すことになった。

実は一九七四年（昭和四十九）に十七日間をかけてヨーロッパの聖地を巡礼した際、ローマの本部でお会いした。

ローマ法王の服装は白、これに対しイエズス会総長の服装は黒だったためアルペ総長は「黒の法王」とも呼ばれた。アルペ総長は黒の服装で二階から階段を降りて来られ、流ちょうな日本語で山口市今道にあった当時の教会の思い出を話された。山口教会が現在の亀山に建てられたのは戦後のことで、戦前は駅通りに近い今道にあった。

一九八一年、アルペ総長はローマ空港で脳血栓で倒れ、十年間の長く重い病床生活の後、一九九一年、帰天された。

長束の黙想の家の図書室にはアルペ神父に関するたくさんの本があり、黙想の途中、数冊読ませてもらった。アルペ神父は「希望をもたらす人」として大勢の日本人に愛され、今、列福運動も進んでいる。

アルペ神父、バラ神父をはじめとする外国人宣教師は生まれ故郷を離れ、私利私欲を捨て日本で神の国のためにすべてを捧げた…神を見た人はいないが、私は外国人宣教師の生き方に神を見るのである。

ローマでアルペ総長と会う
＝アルペ総長の左が筆者、左端が妻